

第 24 回健康スポーツ部会における主な意見

<議題（1）現場視察・ヒアリング及びガイドブックについて>

（現場視察 ①総合型地域スポーツクラブ スポネット弘前 ②日本ゴルフ協会 ③株式会社アイエイアイ ④石川県白山市 ⑤千葉県柏市 ⑥大阪府吹田市立健都ライブラリー ⑦BOAT KIDS PARK Mooovi（モービィ）戸田）

（現場視察・ガイドブックについて）

- スポネット弘前は、総合型 SC の草分け的な存在で、全国でも有名なクラブ。地元弘前市にも根付いており、商業施設や廃校などを活用して事業を展開。課題としては、過疎化が進み、高齢者の移動も困難な中、規模拡大が限定的である点や、担当者の熱意に依るところが大きく、後継者がいなければ継続が難しいという点がある。また、行政との連携において、補助金をどのように活用するかという点なども課題である。
- 男性で最も人気の高いスポーツはゴルフであるという調査結果がある。また、20 種類の競技で調べたところ、ゴルフは認知症予防やメンタルヘルス面でも最も健康に寄与している。700 万人もいるゴルフ人口が今後減少しないためには、SIB（ソーシャルインパクトボンド）などを活用し、介護予防の効果等、財政的なインパクトの大きさを示すことでも、ゴルフ振興に寄与できると考える。
- ゴルフは高齢者グループで取り組んでいる種目の中で 11%であり、また富裕層ばかりではなく、所得層の 200 万円以下でも第 2 位となっている。相当歩くこと、一人ではなくグループでやることなどが、ゴルフのフレイル予防等への効果の要因ではないかと考える。また、ゴルフは笑うことが多いスポーツであることも確認されており、かつ緑の中で楽しみながら実施できることも効果的だと考える。
- 白山市の事業は、自治体ではなく医者（医療）側から提案があったユニークな取組。保健師等が多忙な中で、地域で認知症予防に思いがある医療側がどのような形で提案すれば良いかのヒントになる。当初は 1 年目で参加者を卒業させる計画だったが、継続可能な方向に転換したものの、参加者の増加に伴う財源確保は課題となっている。
- 白山市の取組は、民間企業が主導して実施している取組ではないため、全国展開する際は、自治体内での連携、さらには医師会のハードルなど、構造的な問題を理解する必要がある。高齢者も MCI のテストを受けることに抵抗感があり、自身の認知機能低下について怖い、知りたくない人も多い。また、知ったうえでうまく運動教室に誘導するところにも課題がある。
- 柏市は、一つの取組ではなく、様々な取組を長期にわたり継続的に実施したところに特徴がある。ウォーキングも単にイベントを実施するだけではなく、参加者による自主的なグループ化を促し、また継続しやすいようウォーキングマップを作成するなど、全国の自治体の中でもあまり例を見ない工

夫がある。さらに、取組を組み合わせることで市民を「育てる」ための連続的なプログラムが実施できている。

- 柏市は、複数のプログラムを長期的に実施したことのアウトカムが調査結果で出ている反面、働く世代や若年層への取組が不十分である点や、スポーツ推進委員が定員の3分の1しか活動できていない点、プロチーム活用の余地がまだまだある点等の課題がある。人口動態も踏まえて、面としてスポーツ推進と健康増進の連携ができるとよい。
- 吹田市は、特有の条件が整っている面もあるが、全国でも参考にできる点もいくつかある。図書館には健康関係の本が集まっているコーナーがあり、設計段階から多目的室を設置するなど場所の確保がなされている。また、指定管理者は、図書館司書とスポーツ関係企業が連携しているため、図書館内にスポーツウェアを着た職員がおり、15時に館内一斉のラジオ体操を流す取組も行っている。他方、スポーツ部局ではなく健康関係部局が中心となっており、自治体内の連携が進んでいないことが課題である。
- Moovvi では、(株) ボーネルンドと連携し、質の高いあそびを提供しており、「いろ」「かたち」等が自然に身につく工夫がなされており、公営競技にとって参考になる取組。戸田市では、ボートレース場全体でも、舟券を買いに来たファンの方の健康増進に関する取組ができないか構想中であり、公営競技は社会貢献につながる可能性があると考えられる。

(ガイドブックについて)

- 活用する対象が課題をどのように克服すれば良いか分かるよう、当該事例がどのような入り口で始めたのか、どのように当たり前事化したかなどの内容を入れて、入口にポイントがあったのか、継続のコツなのか、見て欲しい観点があると分かりやすい。関係者などのマップのような図を付けることも一案。また、財源及び財政規模や、事業の位置づけ（自治体のプロジェクトの一環等）が分かるような記載も検討頂きたい。
- 自治体や保険者・医療機関等が活用しやすいよう、参考資料などで、スポーツ実施率やスポーツが健康にもたらす効果のエビデンス（うつ予防等）など、スポーツの推進に当たって使えるデータがあると良い。
- 事例から推察される大きく共通する課題として、①規模が限定的、②助成金が前提、③キーパーソンが存在、が挙げられる。これらをクリアできた要素を類型化して提示し、共通する課題解決方法が示せるような専用のページやフォーマットも検討するとよい。
- 足立区の例は図書館の取組だと分かりづらいので、実施主体を明示するなどし、具体的な記述をしてはどうか。また、タイトルは、文字がなるべく少ない方が良いので、「Sport in Life ガイドブック」ではどうか。「ライフパフォーマンス」というワードを Sport in Life と結び付けて示すことは

馴染むと考えるので、「ライフパフォーマンス」というワードを入れることも一案。

- 媒体（紙、電子）に応じて、QRコードやURLをなるべく掲載するとよい。また、ライフパフォーマンスの認知度を高めるチャンスだと思うので、スポーツ庁としてもガイドブックを通じてぜひ発信するとよい。
- フォーマットに財政規模が出るとよい。また、タイトルは「Sport in Life ガイドブック」と簡潔にし、サブタイトルで「〇〇の実現に向けて」などをつけてはどうか。
- 「Sport in Life」というワードは世間に浸透しているわけではない中、自治体や企業など活用する側への伝わり方も考え、活用ターゲット別のものを作成することも一案。フォーマットは受け手目線で、見出しも活用ターゲットにしっかり響くものが良い。
- 検索ワードをまとめるなどの工夫があるとよい。また、重点的に発信したいポイントを示し、みんなで課題解決に取り組んでいこうというメッセージになることが重要。
- 取組の事例先に照会したい場合、所管や担当部署を記載いただくとスムーズにつながるのではないかと。
- ステージごとに表出した課題をどのように解決したか見せるとともに、成果を獲得する過程におけるエビデンスの話も重要。また、事業規模が限定的、補助金への依存、キーパーソンの存在という課題に対する解決方法や、継続のノウハウ、限られた資源の活用方法について、どのように示すことができるか検討が必要。

<議題（2）ライフパフォーマンスの向上に向けた目的を持った運動・スポーツの推進について>

- 「ライフパフォーマンス」という言葉は今後重要になってくるので、可能な範囲で文部科学省と連携し、保健体育の教科書に入れ込んで若い世代から教育・啓発できると良い。
- 学校教育の場で教えてもらうことは重要であり、「ライフパフォーマンス」という言葉が学習指導要領に入れば、その影響は大きい。
- 一部の部活動では、思春期の中高生がやりすぎてしまうことの課題がある。スポーツの素晴らしさと同時に、適切な体調管理の重要性も広めてほしい。
- 長官のようなトップアスリートが「身体を動かそう」というスポーツの基本的なところを発信しているのは効果的であり、普及にもつながるので、今後も継続してほしい。

(以上)